

第15回阿武隈水系研究会 資料

—宮城県白石市越河五賀覚永寺を訪ねて—

相 原 淳 一

1. はじめに

白石市越河の考古学的調査は『刈田郡誌』（刈田郡教育会編 1928）が初見である。越河村から大平村の西方一帯に石器が出土することが記されている。昭和初期に旧制白石中学校では「矢の根石」拾いをする生徒がおり、その一人の亘理梧郎氏は南は越河まで出かけていたことを記す。その当時、土器の文様で年代がわかるという重要さに気づかず、ほとんど石器の収集にのみ留まっていたと回顧する（亘理梧郎 2014『わらし子の街角余聞』）。

亘理梧郎氏は 1915 年 2 月 28 日、亘理盛・みつの五男として白石市亘理町にて誕生した。1929～30 年の中学校 2、3 年の頃、級友が採集した石器を見せられ、自分でも「矢の根石」拾いを始め、暇さえあれば、南は越河から北は平沢まで、自転車で相当の箇所を見て回るようになった。1933 年 5 月 11 日には、当時國學院大學学生の片倉信光氏が指導教授の鳥居龍藏博士を招き、白石中央公会堂で「考古学上より見たる刈田郡の上代文化」という講演が行われた。亘理はこの時初めて「考古学」という言葉を知り、深く感銘を受け、考古学熱に火がつき、医師志望から考古学へと進路変更するに至り、片倉の後を追って國學院大學に入学した。しかし、亘理は東京で 2.26 事件を目の当たりにすることとなり、時節がら考古学ではなく、日本近世史へと「転向」して卒業し、徳川林政史研究所を経て、東京で教職に就いた。片倉は有栖川宮記念公園陳列館（現在の江戸東京博物館）の初代学芸員を務めた後、1938 年には仙台の斎藤報恩会博物館に移った。1945 年 7 月の仙台空襲により博物館も被災し、多くの資料を失う中、その保全に努めた。

2. 戦後の考古学的調査

片倉は『宮城県史』第 1 卷「古代史」（1957）を執筆した東北大学の伊東信雄教授に協力する形で、佐藤庄吉氏とともに白石・刈田地区の遺跡や神社仏閣・城館跡の悉皆的な調査を行った。その成果は、1960 年に『刈田郡全域土器石器調査表』（1960）にまとめられ、佐藤の自宅福岡深谷に開設された不忘郷土研究所文化財収蔵庫は一般にも公開された。越河・五賀・平地区では、土器・石器出土地が鶴巻田・西屋敷前・八幡台西・峠沢・上馬場・中郷良・内越前・岩崎の 8ヶ所、城館跡が 14ヶ所掲載された。『白石市史 別巻考古資料篇』（1976）には、片倉・佐藤の収集資料を中心に公刊された。

3. 知られざる旧石器の調査

相沢忠洋氏が、1946 年に群馬県笠懸村岩宿遺跡において、切り通しの赤土の中から石器を発見し、1949 年には明治大学考古学研究室が発掘調査を行い、これまで人類はいないとされていた関東ローム層の中から旧石器を確認したことは、戦後考古学における最大級の成果である。

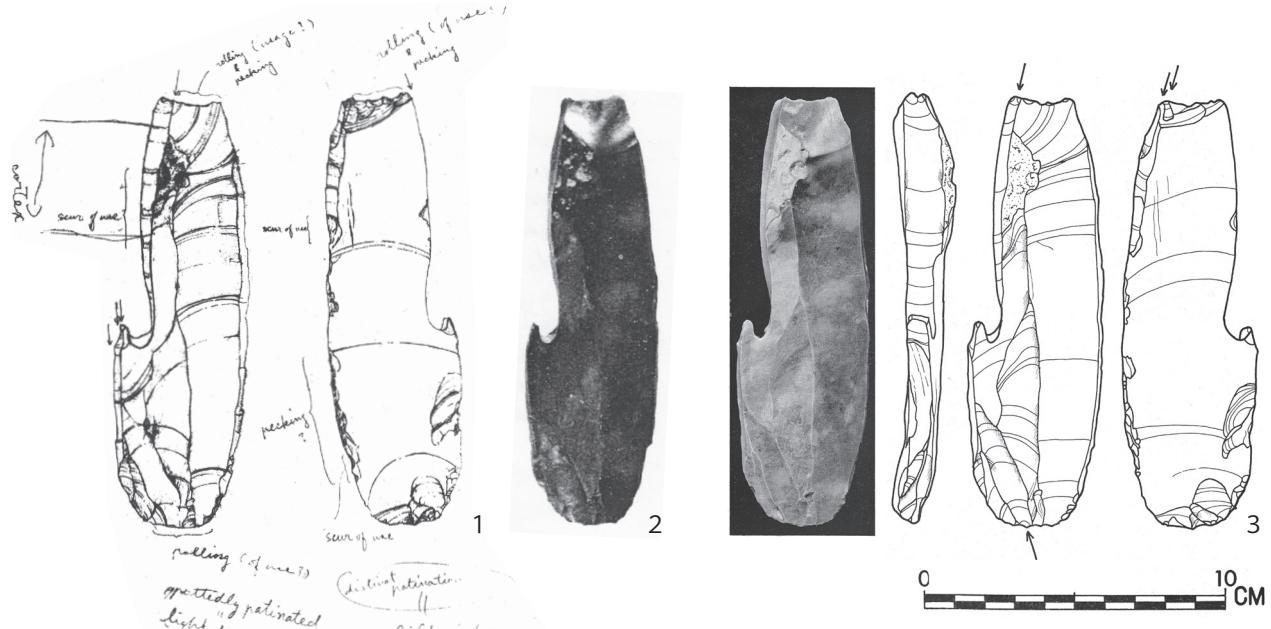
こうした旧石器の探索は、宮城県内でも行われ、伊東信雄教授と片倉信光氏・佐藤庄吉氏が連携を

取りながら、遺跡の分布調査を進めたこともあり、しばしば門下の学生が白石・刈田地区に調査に訪れていた。当時大学院生だった林謙作氏は、蔵王町鉄砲町付近の吾戸^{あがと}囲の土取工事の折、旧石器（第1図）が出土したという情報を頼りに、1961年5月に同町上原田遺跡、同年6月に同町明神裏遺跡の縄文時代早期の小発掘調査を行っている。今回、覚永寺（小川真氏）のもとに残っていた1961年5月7日付けの林の馬場台遺跡出土石器2点の借用書と、1974年の新聞記事を確認することができた（第2図1・2）。記事は、旧石器を鉄砲町付近で探したが、見つけることはできず、越河の槍先形尖頭器が宮城県における旧石器発見の第1号であると伝えている。小川真氏の談によると、林氏への石器の貸出しあは父親の信行氏が行い、その後の白石市史編さんの折には、編さん委員の中橋彰吾氏も調査に訪れている。

『白石市史 別巻考古資料篇』掲載の越河馬場台遺跡出土石器2点（第2図3）には、「越河村字五賀 馬場山ノ墓□□ヨリ 昭和23年 発見者 小川恵見」「剥片 覚永寺附 越河 昭和23年 産地寺墓所附近」と注記されている。この度、福島県国見町在住の小川^{さとみ}恵見氏から直接、当時の状況をお聞きすることができ、小川恵見氏の旧制白石中学校～白石高等学校時代に、1945年に旧制白石中学校に赴任した亘理梧郎先生の指導を受けながら、収集した資料であることが判明した。

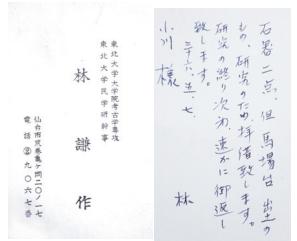
亘理梧郎氏は東京大空襲後に東京を引き揚げ、旧制白石中学校の教壇に立った。戦後は郷土研究部の指導（部長飯沼寅治・副部長亘理梧郎）にあたった。亘理は1952年に宮城県教育委員会の文化財担当、1959年には宮城県図書館勤務となり、仙台に転居している。小川恵見氏自身は郷土研究部ではなく、生物部に所属し、亘理先生からは個人的に石器に関する教えを受けていた。

現在、覚永寺に保管される資料のうち、第2図4-1cが両面加工の槍先形尖頭器である。かつては露頭の黄褐色土層から薄手無文土器の小片も出土したという。槍先形尖頭器は、このほか白石市内では菅生田遺跡・高野遺跡・馬牛沼遺跡からも出土している（第3図）。

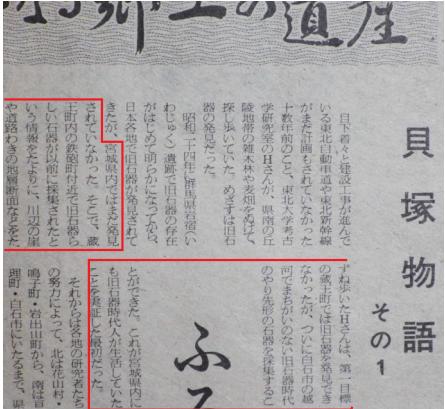


1 林謙作実測図(1961)（相原淳一 2016「宮城県における薄手無文土器の再検討」『東北歴史博物館研究紀要』17から）
2『発掘された古代の歴史 宮城県考古展』図録(1970)
3『白石市史 別巻考古資料篇』(1976)・『蔵王町史 資料編I』(1987)

第1図 宮城県蔵王町「鉄砲町」出土彫刻刀形石器

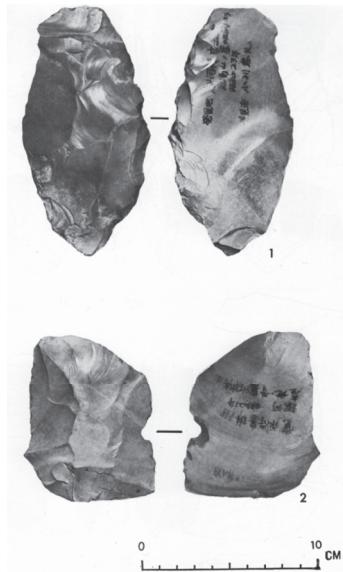


1. 昭和 36 年 5 月 7 日
林謙作氏石器借用書

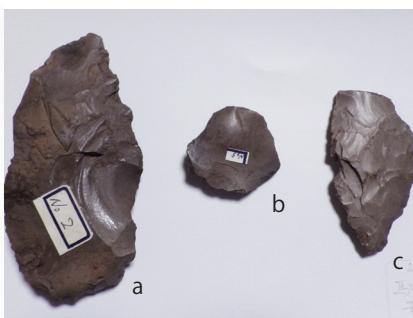


2. 昭和 49 年 1 月 1 日 「大いなる郷土の遺産 貝塚物語 その 1」

宮城県内ではまだ発見されていなかつた。そこで、蔵王町内の鉄砲町付近で旧石器らしい石器が以前に採集されたという情報をたよりに、川辺の崖や道路わきの地層断面などをたずね歩いた H さんは、第一目標の蔵王町では旧石器を発見できなかつたが、ついに白石市の越河でまちがいのない旧石器時代のやり先形の石器を探集することができた。これが宮城県内にも旧石器時代人が生活していたことを実証した最初だつた。



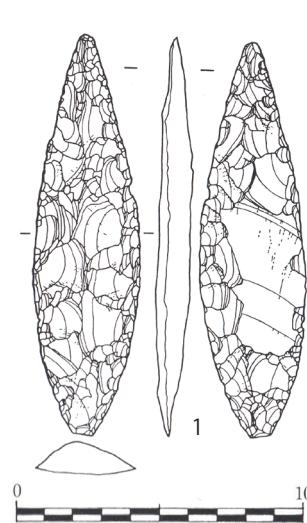
3. 『白石市史 別巻考古資料篇』
(昭和 51 年 3 月 31 日)
P. 75 馬場台遺跡



4. 馬場台遺跡出土石器 (観永寺所蔵)



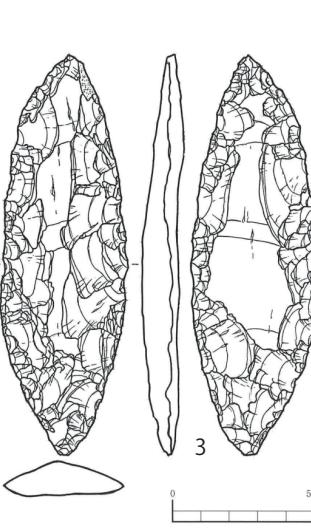
第 2 図 宮城県白石市越河五賀馬場台遺跡出土の石器



1. 白石市蔵本菅生田遺跡



2. 白石市福岡深谷高野遺跡



3. 白石市斎川馬牛沼遺跡

1	尖頭器 (白石市) (白石市教育委員会1968『白石市周辺の遺跡遺物目録』白石市文化財調査報告書第7号) 菅生田遺跡 (宮城県教育委員会1971『発掘された古代の歴史—宮城県考古展白石展示会一』) (白石市) (蔵王町史編さん委員会1987『蔵王町史 資料編Ⅰ』)	1968年当時、白石市調練場の鈴木準之助所蔵。写真掲載のみだったが、『蔵王町史』に実測図掲載。実測者不明。
2	尖頭器 (白石市深谷) (宮城県教育委員会1970『発掘された古代の歴史 宮城県考古展』) 高野遺跡 (白石市史編さん委員会1976『白石市史 別巻考古資料篇』) (白石市) (蔵王町史編さん委員会1987『蔵王町史 資料編Ⅰ』)	『発掘された古代の歴史』に切り抜き写真掲載。『白石市史』に黒バック写真・実測図掲載。実測者不明。『蔵王町史』に実測図掲載。実測者不明。中橋彰吾所蔵。
3	尖頭器 馬牛沼遺跡 (白石市教育委員会2011『市内遺跡発掘調査報告書 6』白石市文化財調査報告書第41集)	1984年11月、中橋彰吾が遺跡登録カードに掲載 (未登録)。 採集者・実測者不明。実資料所在不明。

第 3 図 宮城県白石市内出土の槍先形尖頭器

4. 開発に伴う事前調査から

越河地区の発掘調査は、東北縦貫自動車道建設に先立つ事前調査として、1968・1971年に湯ノ倉館跡の調査が宮城県教育委員会によって行われた（宮城県教育委員会 1980）。2019・2020年には五賀の馬場台遺跡の発掘調査が白石市教育委員会によって行われている（白石市教育委員会 2021）。

(1) 湯ノ倉館跡

福島盆地と越河盆地の狭隘部に立地する。江戸時代の地誌『仙台領古城書上』『封内風土記』等には記録がなく、館主等は不明。発掘調査では、北郭と南郭、堀切、土塁跡が検出された。出土遺物の
こうがい 筒や火鉢は、中世の所産である。無字の古銭も1枚出土している。

(2) 馬場台遺跡

越河盆地の北西端の丘陵上に立地する。遺跡の南側の中郷良白鳥坂の西側には日本武尊を祀る白鳥神社がある。遺跡の西側丘陵裾部には旧奥州街道が北進（第5図）し、「わずかに白鳥神社から五賀の東北本線踏切まで約80mが面影を残している。」（高倉淳ほか 1978「奥州街道」『歴史の道調査結果略報』宮城県文化財調査報告書第55集）

太陽光発電設備設置に先立つ事前調査と遺跡の範囲確認調査が行われている。検出された遺構は、掘立柱建物跡が4棟、竪穴建物跡8棟などである（第5・6図）。うち掘立柱建物跡3棟は大型の柱穴をもつ総柱建物跡であり、その特徴から計画的に配置された倉庫群であったと考えられた。竪穴建物跡の遺物は奈良時代前半とみられる。以上のことから、①苅田郡衙正倉別院、②苅田郡内の郷倉、③地元豪族の米倉、④『延喜式』に記録が残る「篤借駅」関連施設の可能性が指摘されたが、「東山道」に關係するとみられる道路跡は検出されなかった。

参考までに、覚永寺に伝わる古道（第7図）では、小野作～覚永寺跡（熊谷椿）～斎川大義寺（あるいは馬牛館方面）とされ、雨塚山山裾を北上するルートである。ほぼ同様の道筋：石大仏—亀井清水—山居—山頭前—山頭—諏訪台—治源寺—上台—小野作—峠沢—堀切—中村—清水（熊谷椿）—鶴

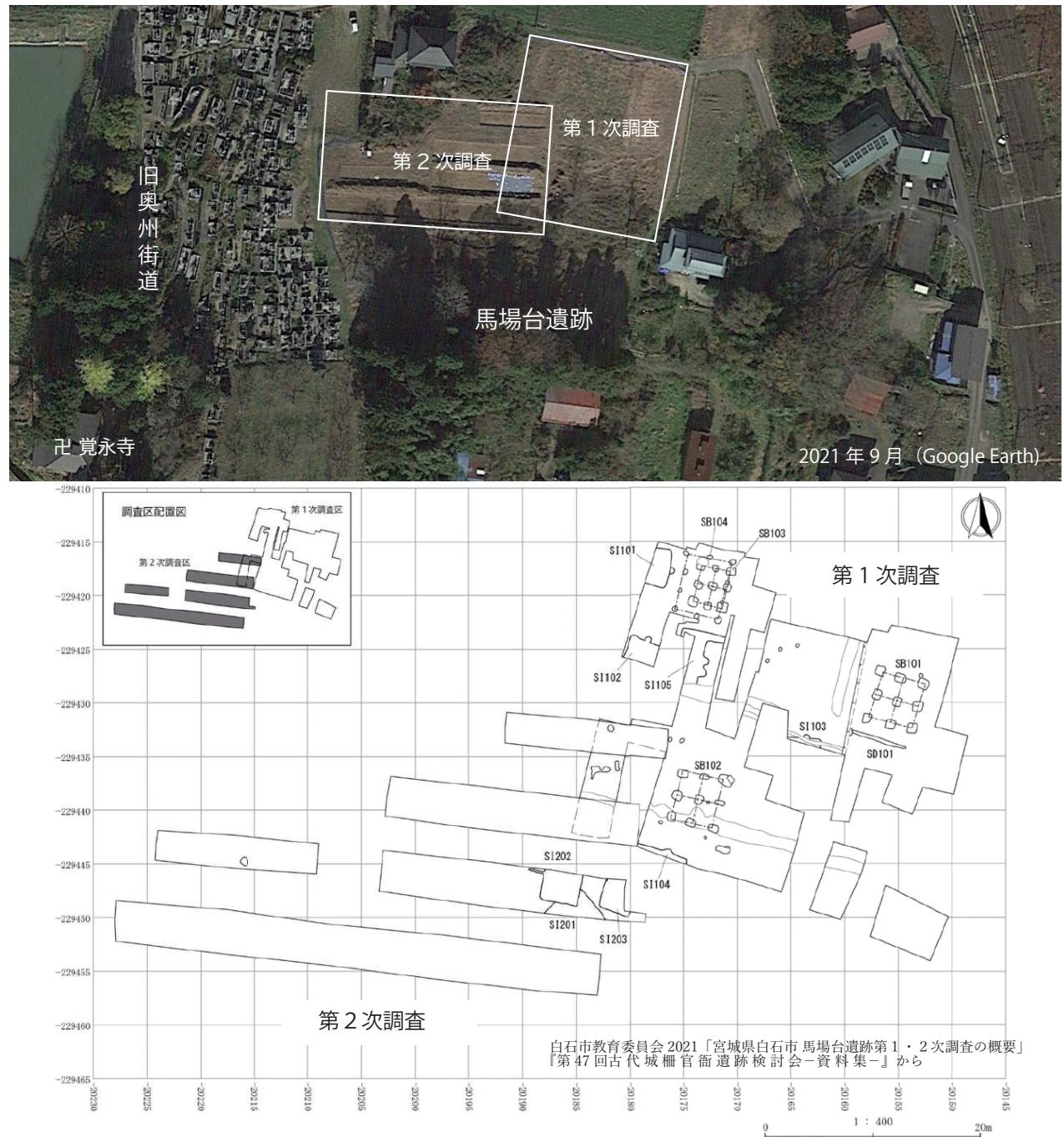


宮城県教育委員会 1980「湯ノ倉館跡」『東北自動車道関連遺跡調査報告書IV』宮城県文化財長報告書第71集
第4図 宮城県白石市越河湯ノ倉館跡（宮城県教育委員会 1980）

巻—台畠—中町—斎川は、白石市文化財保護委員会の中橋彰吾（1997「幻の東街道を求めて」『広報しろいし』458）が指摘する。一方、風間觀靜（1984「地名の研究」『白石市史3の(2)』）は、上記諫訪台以北、鍛冶内—中郷良—見妙—乙森—台北—斎川の旧奥州街道付近を想定している。

5. おわりに

郷土史とはいっても専門化が進み、容易に取り組める状況ではなくなってきてる。一方で、今、記録として残しておかなければ、永久にわからなくなってしまうようなことも多い。事実に対する一人ひとりの興味と関心こそが、郷土史を支え、地域の紐帯をより確かなものとしていくに違いない。



第5図 宮城県白石市越河五賀馬場台遺跡(1)



第1号掘立柱建物跡 (SB101)



第1号掘立柱建物跡柱穴断面



第3・4号掘立柱建物跡 (SB103・104)

白石市教育委員会 2021「宮城県白石市馬場台遺跡第1・2次調査の概要」『第47回古代城柵官衙遺跡検討会-資料集-』から

第6図 宮城県白石市越河五賀馬場台遺跡 (2)



第7図 宮城県白石市越河地区の覚永寺伝承古道